



《echos of forest #7》(部分) drypoint | 90×60cm | 2025

2025年  
5月17日(土) — 6月22日(日)

 アート格納庫M  
MARUJU ART HANGAR

鏡 <sup>ka</sup>  
|  
鏡 <sup>ga</sup>  
|  
鏡 <sup>mi</sup>

伊藤学美

ITO  
Manami

幽 <sup>yu</sup>  
|  
香 <sup>ko</sup>

アート格納庫M 第6回企画画展  
伊藤学美展覧会

# 鏡と幽香

アート格納庫M第6回企画展  
伊藤学美展覧会

伊藤学美

ITO  
Manami

2025年

5月17日(土) — 6月22日(日)

会場 | アート格納庫M

開館時間 | 10:00-17:00 (入館は16:30まで)

休館日 | 月曜日 (月曜日が祝日の場合はその翌日)

入館料 | 大人1000円(県民800円)、学生800円(県民600円)、  
中学生以下無料(要保護者同伴)、その他各種割引あり。  
詳細はHPをご確認ください。

オープニングトーク

伊藤学美 × 尾崎信一郎 (鳥取県立美術館館長)

2025年5月17日(土) 15:30-17:00

※予約は必要ありませんが入館料が必要です。



株式会社 丸十 アート事業部

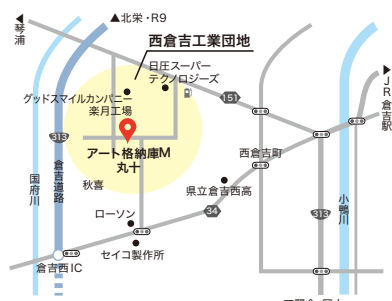
〒682-0925 鳥取県倉吉市秋喜350-23

Tel:0858-48-2211 Fax:0858-48-2200

E-mail:info@arthangarm.com

https://www.arthangarm.com

アート格納庫Mは鳥取県倉吉市で創業70年以上の歴史を持つ業務用品商社、株式会社丸十が運営する常設展示スペースと企画展示スペースを合わせ持つギャラリーです。会社に隣接する空き倉庫を改修し倉吉とゆかりのある原口典之の作品《Oil and Water》と《Untitled FCS》を“格納”するスペースとして構想。原口作品に隣接する企画展示スペースでは数ヶ月に一度展示替えを行い、若手アーティストや地元ゆかりのある作家の作品を中心に展示・販売を行います。バリアフリーになっておりますので、車椅子の方・お子様連れの方のご来場大歓迎です。



[交通のご案内] ◆車または観光バス

◎JR倉吉駅からタクシーで約15分

◎倉吉道路・倉吉西ICより約1km

◎県道34号線、または県道151号線から西倉吉工業団地内にお入りください。

黒色と黄色のタテ長の看板が目印です。



《forest #1》drypoint | 45×60cm | 2023



《forest #2》drypoint | 100×70cm | 2024

伊藤学美 Manami ITO

1987年鳥取県倉吉市出身。2011年京都市立芸術大学卒業、同年アールト大学(フィンランド)交換留学、2013年京都市立芸術大学大学院を修了。銅版画のドライポイント技法を用いて制作している。主な個展に「floating」広島市立大学芸術資料館(広島/2024)、「surface echo」京都アートゾーン神楽岡(京都/2022)、「IN WHITE」ギャラリー恵風(京都/2019)、「Transcending photography」クリフォードチャンス法律事務所(ロンドン/2017)、「Tra riflessi e trasparenze nel mondo di I」ギャラリー74/b(ミラノ/2016)など。主な展覧会に「ART OF THE REALアート・オブ・ザ・リアル時代を超える美術—若冲からウォーホル、リヒターへ—」鳥取県立美術館(鳥取/2025)、「レジデント作家二人展+汽水域」金沢21世紀美術館(石川/2023)など。

伊藤学美の新作

尾崎信一郎

伊藤学美は一貫して樹木を主題とした風景をモノクロームの画面の中に転写してきた。直接に版を刻むドライポイントという技法は常に滲みの効果を伴うが、伊藤はそれを光のきらめきへと転じる。水面や木漏れ日、伊藤がしばしば用いるモチーフが印象派の画家たちによっても好まれた点は留意されてよい。そこに降り注ぐのは太陽の光であり、きらめきを感じるのには私たちの視覚である。つまりそれは野外の、人が眼差しを向けた風景なのだ。印象派の画家たちが光彩陸離たる豊かな色彩の中に風景を浮かび上がらせるのに対して、モノクロームの画面の中に光を封入した点に伊藤の版画の大きな魅力が存している。

構図に関してはどうか。今、水面と木漏れ日という言葉を用いたが、それらが水平と垂直という軸性と深く関わっていることは容易に理解されよう。多くの場合、伊藤の絵画は上から見下ろした水平の面、もしくは立ちほだかるかのような樹木が暗示する垂直の軸のいずれかの方向性を有している。モノクロームのイメージがたやすく風景へと転じる理由はこれらの軸性と関係があり、いずれも風景の前に私たちが立っていることを暗示する。

さて、風景という言葉は何度も用いたが、私は風景こそ戦後アメリカ美術を通底する隠された主題であると考え。この問題についてここで詳述する余地はないが、私の考えでは風景が成立するために二つの要件が必要とされる。一つはその前に人が立つことであり、もう一つは時間の持続的な経過の中で体験されることだ。(\*)今述べてきたとおり、伊藤の版画は技法と構図において人が向かい合うことを前提としている。それでは時間についてはどうか。この点についても新作では興味深い試みがなされている。再び印象派を参照しよう。例えばモネの連作。睡蓮でも積み藁でもよい、ここでは移り変わる陽光の中で対象の時間的な変化が捉えられていた。風景とは永遠の変化

の相なのである。今回、伊藤はゴースト刷りを導入した。ゴースト刷りとは本刷りの後、版に残ったインクのみで刷る技法であり、繰り返すにつれてイメージは薄れていく。反復されながら時間が経つにつれて減衰していくイメージ、伊藤はそれに幽香という言葉を与えている。あるいは作品のタイトルに用いられるエコー(木霊)もまた反復されつつ次第に消えていくことによつて伊藤の作品に似つかわしい。ところでエコーとはギリシャ神話に登場するニンフ(妖精)の名でもある。この時、さらに文学的な連想を重ねることができよう。今回の個展のタイトルにおいて「幽香」と対比される「鏡」から連想されるもう一人のギリシャ神話の人物は水面に映った自分の姿に恋するあまり最後は衰弱して死んでしまうナルキッソスである。興味深いことには、プッサンをはじめ、ナルキッソスを描いた絵画の中にはしばしばその傍らに、彼に恋焦がれるエコーの姿も描き込まれている。ナルキッソスもまたイメージの反復、あるいは衰弱と関係があり、伊藤の版画に召喚されるにまことにふさわしいキャラクターなのである。

さらに作品の外部、アート格納庫Mの室内へと目を転じよう。そこではまさにナルキッソスを映し出す鏡面のごとく原口典之のオイルプールの表面が私たちを見返しているではないか。伊藤が新作に垂直性を暗示するForestというタイトルを冠したことに、かかる水平性に拮抗することによって作品に力を与えようとする暗黙の意志が感じられる。木々の中で木霊するイメージ、作品を映し出すオイルプール。エコーとナルキッソス、「鏡と幽香」とはまさにこの会場で発表されるために制作された作品なのである。

(おさき・しんいちろう 鳥取県立美術館館長)

(\*)この点については以下を参照されたい。尾崎信一郎「風景としての美術」辻成史編「はるかなる「時」のかたに 風景論の新たな試み」三元社 2023年